

法解釈の方法論

——その諸相と展望

山本敬三・中川丈久 編

2021年3月発売／442頁／定価6600円(税込)
A5判／上製



編集担当者から 『法学教室』の読者のみなさんは、『民商法雑誌』という雑誌を御存知でしょうか。『民商法雑誌』とは、私法と公法に関する学術論文や判例批評を掲載する、研究者の先生向けの雑誌です。本書はこの『民商法雑誌』の特集を単行本化したものです。

このように紹介すると「学生の自分にとっては難しいのでは」と思われるかもしれませんが、もちろん手軽に読める内容ではありませんが、「利益衡量」「仕組み解釈」「罪刑法定主義」「違憲審査基準」など、学生のみなさんにも馴染みのある概念もたくさん登場します。法学部3回生(3年生)以上や法科大学院生の方であれば、十分に読んでいただけたと思います。

普段、息をするように行っている「法解釈」という思考活動も、このような形で言語化されると、「言われてみればそうだ」とあらためて納得することも多いのではないのでしょうか。一方で、本書の冒頭で紹介される来栖三郎博士(民法学。1912-1998年)の「法解釈」に対する辛辣な言説には反感を覚える人もいるかもしれません。いったいどんな言葉なのか、気になる方は、ぜひ本書を開いてください。(〇)

Index



13の法分野の解釈方法を相互比較するという試みです。

序章——プロローグ

未来志向の法解釈(亀本 洋)

第一章 法解釈の方法論

日本における民法解釈方法論の変遷とその特質(山本敬三)

行政法解釈の方法——最高裁判例にみるその動態(中川丈久)

経済法解釈の特徴について——競争法におけるルールとスタンダード(川濱 昇)

商法学における法解釈の方法(田中 亘)

第二章 経済分析による法解釈の可視化

判例に見る知的財産法解釈方法論と政策形成(前田 健)

国際私法解釈論に関する若干の考察——判例分析をとおして(河野俊行)

刑事訴訟法解釈の方法(稲谷龍彦)

第三章 法分野固有の解釈指針

民事訴訟法の分野における解釈方法論(垣内秀介)

労働法における法解釈の方法に関する覚書(山川隆一)

最高裁判例に見る租税法規の解釈手法(佐藤英明)

刑法の解釈方法と判例(品田智史)

終章——エピローグ

最高裁の憲法解釈方法に関する一考察——なぜ審査基準論を採るべきか(浅野博宣)